

キラキラ

渡辺康博

「新潟山岳会創立 50 周年」言葉にしてしまえば簡単ではあるが 43 歳の僕は 50 年という歴史の重さを、まだ経験していない。

例えば時は戦国。1600 年関ヶ原の戦い。徳川家康 58 歳。その 50 年前と言えば、今川義元の人質として囚われの身。8 歳の竹千代。誰がこの竹千代が天下を取ると想像したであろうか？ 50 年間、幾多の戦を潜り抜け。政略に謀略を重ね。時に動き、時に待ち、時に流され、運を掴んでの 50 年。50 年とはさまざまなドラマが凝縮された歴史そのものだ。

時、50 年前。森田青年や阿部青年を中心とした仲間達が「くちなしの会（のちの新潟山岳会）」を立ちあげた。青年達は何を夢み、何を語り、どんなにキラキラとしていたことだろう。もし、タイムマシンがあるならば、そのキラキラな青年達と酒を飲み交わしたいものだ。きっと、がむしゃらに山に入り、岩にしがみつき沢を泳ぎ雪にもがき。きっと、どこから湧いてくるのか自分でも戸惑うほどの情熱を「新潟山岳会」にぶつけたのであろう。そこに目指すべき目標があったのかは分からない。あるいは日々の積み重ねこそが目標だったのかもしれない。

とにもかくにも 50 年という歴史を重ね、その歴史の先端に、今、この「新潟山岳会」がここにある。どうだろう？ あの頃のキラキラとした青年達は今の「新潟山岳会」を誇りに思ってくれるだろうか？ 「今の若い奴らは情けない。」と歯ざしりをしているだろうか？ 「まあ、それなりに楽しそうにやっているな」と笑ってくれるだろうか？ 未だにキラキラを失わない先輩達の目に、僕らの世代からも、なにかしらのキラキラを見てとれることができるだろうか？

幸せなことに、この 50 年の節目に僕も新潟山岳会のメンバーとして在籍し、幸せなことに、当「くちなし」編集の一員を任された。「今までの新潟山岳会をお前達の手で見て、お前達の耳でしっかり聞き、受け止め。これからの新潟山岳会を仲間と一緒に作っていけ。」というメッセージ。そんな先輩達の想いそのものが、この「くちなし」編集であり、50 周年の節目であるように感じている。その作業の一つ一つは、まるで親父と息子とが、思い出話とこれからの期待を肴に酒を酌み交わすかの如く、照れくさくて温かい作業だった。

そう、「新潟山岳会」とは僕にとっては家族だ。僕のたかだか 43 年の歴史もいろいろあった。きっと、これからの人生もいろいろあるだろう。そんな YASU という人生の歴史の中で「お前の財産はなんだ？」と聞かれたらなんの迷いもなく「新潟山岳会に入会した事」と答える。なんの曇りもなく「新潟山岳会」は僕にとって一番の誇りだ。

50 年後。100 周年では僕は 92 歳になっている。きっと、まだまだ元気に山を歩いているはずだ。その時になったら、また、若々しい新潟山岳会の仲間たちとキラキラと笑いながら酒を飲もう。